

近代の日土友好関係における野田正太郎の業績

野田 美帆

野田正太郎は、日本の民間人としてトルコのイスタンブルに赴いた最初の派遣・駐在新聞記者である。野田正太郎がトルコへ渡るきっかけとなり、また、日本とトルコの友好関係を築くきっかけとなったのは、1890(明治 23)年にオスマン帝国の軍艦が和歌山県大嶋樫野崎の沖合において座礁・沈没した「エルトゥールル号事件」であると言われている。

「エルトゥールル号事件」に対して日本政府は、日本国内から集めた義捐金と事件の生存者を日本軍艦によってトルコへ送還することを決定する。生存者送還を支持し、義捐金募集活動を活発化させたのは、当時の主要メディアである新聞だった。特に『時事新報』は、どの新聞社よりも多くの義捐金を集め、生存者送還を推奨する社説を書いた。また、自社記者をトルコへ派遣し、自社で集めた義捐金を送り届けさせている。

本研究の目的は、近代の日土友好関係における野田正太郎の業績を明らかにすることであり、派遣記者に選ばれた野田正太郎が『時事新報』の紙面においてどのようなことを日本へ伝えたか調査し考察する。

本研究では、「エルトゥールル号事件」や日土関係に関する文献、また、野田正太郎の考えや行動を知る手掛かりとして野田正太郎が書いた『時事新報』記事を調査対象として文献調査を行った。また、『時事新報』の比較対象紙として、『郵便報知新聞』と『毎日新聞』の2紙を含める。調査対象期間は、トルコ軍艦が来日する一年前の1889(明治 22)年7月から、野田正太郎が『時事新報』紙上で連載を終えた一年後の1894(明治 27)年8月までとし、その期間における調査対象紙から野田正太郎もしくはトルコに関する記事を抽出し、考察の材料とした。

これら3紙の調査の結果、対象期間に限って言えば、『時事新報』は他2紙と比べてトルコに関する記事を多く掲載しており、その内容もトルコの内政事情や諸外国との関わり、日本には無い文化や習慣、宗教の違いなど多岐に渡るものであった。一方の『郵便報知新聞』や『毎日新聞』では、トルコの震災や欧米諸国との関係について電信をまとめたような短い記事で掲載しており、他の情報源を間に挟んでいるため、野田正太郎が直接取材をして書いた『時事新報』の記事と比べると内容の充実さが足りない結果となった。また、先行研究には見られない野田正太郎の連載記事や、野田正太郎がトルコに関する講演会を開いていた事実も発見した。

本研究の結果、野田正太郎の記事からは、野田正太郎が日本とトルコを近づけるため尽力した最も初期の人物であり、当時の日本人にとって未知の国であるトルコを日本に紹介したことが明らかになった。野田正太郎の記事を含む「エルトゥールル号事件」の報道・援助活動は、今日の日土友好関係を支える礎となっている。

(指導教員 呑海 沙織)